

石灯籠群

住吉大社の参道には、600 個以上の石灯籠が並んでいる。そのほとんどが、18 世紀初めに流行した商人や商会からの寄付によるものであった。寄進者の名前が刻まれた特注の灯籠は、住吉の神々の恩恵と、寄進者のビジネスを宣伝するために作られたものである。

灯籠に刻まれた名前は、藍染や肥料、ガラスなどの製造業者、紅花問屋、古着や玩具の販売業者など、さまざまな業種のものがある。また、寄進者の約半数が漁業や海運など海に関わっている。住吉大社は海岸沿いに建っており、何世紀にもわたって西門のすぐ先には大阪湾が広がっていたため、海に関わる生業を営む人々がその恵みを求めてきたのである。近頃の難波津は、奈良や京都の古都を含む関西圏と、瀬戸内海、海外を結ぶ港であった。7 世紀から 9 世紀にかけては、中国との貿易や外交の出発点となった。その後、江戸時代（1603-1867）には、日本海や北海道への重要な国内貿易ルートの拠点となった。

境内にある石灯籠の多くは、内航商人から寄進されたものである。北前船（文字通り、北前船）は、瀬戸内海から日本海沿岸を通して北海道まで行き、各港で交易を行っていた船のことである。19 世紀から 20 世紀初頭の最盛期にはこの交易ルートは、日本の経済を支え、日本文化に大きな影響を与えた。例えば、北海道の冷たい海で採れた昆布を商人が大阪に持ち帰り、その独特のうま味を大阪の料理人が取り入れて、日本料理の基本となる「昆布だし」を作ったのである。

住吉大社の最も大きな灯籠は、船の関係者ではなく、玩具や人形の製造業者の団体が寄進したものである。この灯籠は、アーチ型の橋で有名な「反橋」の近くの水路の内側に設置されている。橋の南側の提灯は大阪の企業、北側の提灯は東京や日本各地の企業が寄進したものである。日本のアクションフィギュアやその他のおもちゃのファンにとっては、バンダイナムコエンターテインメントのような馴染みのある会社もあれば、無名の会社や忘れ去られた会社もある。

おもちゃ屋さんの提灯は 1762 年に初めて寄進されてから、何度も改修・拡大されてきた。1928 年から 4 回にわたり、灯籠は吊り上げられ、新しい大きな石の台座が与えられ、寄付者の名前をさらに増やすためのスペースが設けられた。最近では、2020 年に新天皇の戴冠と令和の時代の始まりを記念して造立された。灯籠は地上 10 メートル以上の高さにそびえたつ。